

---

## ロシア史研ニュースレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.86

July 2012

---

### ロシア史研究会2012年度大会案内

立命館大学（衣笠キャンパス） 10月6日（土）、7日（日）午前  
 同志社大学（新町キャンパス） 10月7日（日）午後

すでにお知らせしたように、ロシア史研究会 2012 年度の大会は、10 月 6 日(土)、7 日(日)の両日に立命館大学で開催されます。また、10 月 7 日の午後は、四学会（ロシア・東欧学会、JSSEES、ロシア文学会、ロシア史研究会）合同大会が同志社大学で行われます。

大会プログラムの概要をお知らせします。個々の報告の要旨については、次号に掲載予定です。

なお、大会にかんする事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局 ([BZP10472\(at\)nifty.ne.jp](mailto:BZP10472(at)nifty.ne.jp)) 宛にお送りください。

#### 大会プログラム

##### 10月6日（土） 立命館大学（衣笠キャンパス）

	A会場	B会場
10:00-10:55	Theodore Weeks "Vilnius under Soviet Rule: Nationality, Socialism, and Everyday Life" コメンテーター：小森宏美	竹村寧乃「1920年代末、ザカフカス連邦における経済機関の増設過程」 コメンテーター：吉村貴之
11:00-11:55	畠山禎「男子中等技術教育の進展と生徒の社会構成：帝政末期ロシア・ペテルブルクの事例研究」 コメンテーター：橋本伸也	三井奈津枝「ヴィシンスキー法学の再検討：ロシア法思想史におけるその位置に関する一考察」 コメンテーター：富田武
12:00-13:30	昼食	
13:30-16:30	パネル「科学とソヴィエト権力：対抗・協調・縫い」市川浩、Nikolai Krementsov、金山浩司、Slava Gerovitch	
16:35-17:30	総会	
18:00-20:00	懇親会	

**10月7日(日) 午前：立命館大学 午後：同志社大学(新町キャンパス)**

9:00-12:00	共通論題『『祖国戦争 200年』に寄せて：軍隊と社会』田中良英、松村岳志、池本今日子、コメンテーター浅野明
12:00-14:00	移動・昼食
14:00-17:30	4学会共同シンポジウム「リーダーとリーダーシップを作るもの」
18:30-	懇親会(京都平安ホテル)

**●パネル「科学とソヴィエト権力：対抗・協調・縫れ」(13:30-16:30)**

趣旨： 2011年3月11日、大地震と津波にともない発生した福島第一原子力発電所の事故は、原子力発電技術のそもそもの安全性、内部被曝や低線量被曝の影響の評価などをめぐり世論を沸騰させ、そうして、社会における科学の機能、さらには“科学と権力の相関”という問題を改めて、深刻、かつもっとも悲劇的なかたちで提起するものとなった。人類破滅の脅威ともなった核軍拡、華々しい宇宙開発、多くの科学者をその専門とする学問ごとパージしたルィセンコ事件、そしてチェルノブィリのカタストロフィーに帰結した原子力平和利用—ソヴィエト科学の歩んだ道は、その歴史のいくつかの段階で権力の科学・科学者への度重なる容喙、あからさまな、しばしば暴力をとまなう介入が目撃された点に最大の特徴があるのであり、この“科学と権力の相関”を現時点で改めて俎上に載せ解明をすすめることは、ソヴィエトという時代に取り組むわれわれ固有の「フクシマ後の世界」にたいする責務でもあろう。

ソヴィエト科学・科学者の史上他に類例をみない権力との緊張した関係をどのように見るべきか。ジョレス・メドヴェージェフの『ルィセンコ学説の興亡』以来ながきにわたって浸透していった見方、すなわち、都合良く科学を利用し、自分たちのイデオロギーを押しつける権力ともつばらその被害者となった科学者という“二項対立的図式”、もしくは“全体主義モデル”とも言われる理解は、ソ連解体前後から公開された資料にもとづく研究によって挑戦を受け、大きく変容しつつある。すでに1970年代において経済学者アレク・ノーヴはソ連社会の“集権的多元主義”構造に注目する見方を先駆的に提示していたが、ソヴィエト科学史においても、科学者(諸集団)と、それら自身決して一枚岩ではなかった党/政府指導部・官僚層との間の複雑な相互作用の分析のうえにソヴィエト科学のありかたを理解し直そうとする見方がひろがっている。

本企画においては、このようなソヴィエト科学の社会的なあり方について、近年のパラダイム転換を主導した研究者を海外から招き、それぞれの視点から“科学と権力の相関”について語っていただくことを通じて、問題に接近したい。「フクシマ後」、われわれ日本社会に暮らすものにとっても、決して無縁とは言えなくなったこの問題をこのようなかたちで議論することには格別の今日的意義があるものと確信する。

■趣旨説明：市川浩：「開会にあたって」(“The Opening Remark”)

■Nikolai Kremmentsov (Tront University)：「諸革命のなかの科学—1917年2月から1932年にかけて—」(“Science in Revolutions: From February1917 to 1932”)

「諸革命」とは2月革命、10月革命、および1920年代末からの「文化革命(上からの革命)」を意味する。ソヴィエト政権初期の時代における科学をめぐる制度確立の歴史とその意義について語る。

■金山浩司：「科学とイデオロギーの狭間で—戦前期ソ連における物理学をめぐる論争の弁証法」(仮)

■Slava Gerovitch (Massachusetts Institute of Technology)：「社会主義下のイノベーション—戦後ソヴィエト数学の公式の構造と非公式のメカニズム—」

("Innovation under socialism: Formal structures and informal mechanisms of postwar Soviet mathematics.")

戦後ソヴィエトの数学は、他の諸分野の科学と同様、“望ましからざる”グループへの接近を制約し、しばしば保守的な研究課題を押しつける、厳格な制度的構造のもとに組織されていたが、ソヴィエト数学界の活動は1950年代から1970年代にかけていくつもの顕著なブレイクスルーを実現し、活発で成果に満ちたものであった。ここでは、公開セミナーや協力のネットワークなど、制度的ヒエラルキーをショート・カットし、ソヴィエトの数学者の間のコミュニケーションを励まし、イノベーション・スピリットを涵養したインフォーマルなメカニズムに焦点をあてる。

(市川浩)

### ●共通論題：「祖国戦争」200年に寄せて—軍隊と社会（9:00～12:00）

趣旨： 2012年は「祖国戦争」（ナポレオン戦争）が勃発して200年目にあたる。それに関して、ロシア国内では数々のイベントや書籍の出版が相次いでいる。その動向にわれわれは倣うつもりはないが、日本の歴史学界では上記の動きに鈍感なようである。もちろん、日本からすれば外国の出来事であるし、それほど真剣に取り組まなくてもよいという考えがあるのかもしれない。しかしフランス革命とそれをヨーロッパ各地に「輸出」したナポレオン戦争は、世界を大きく変貌させた近代の出発点を画す一大事件であったのは紛れもない事実である。

歴史叙述の中でナショナルなバイアスがすべての国に存在し、特に戦争について叙述するときにはそうであった。戦争は総体的に英雄的な神話の最良の源泉であり、ナポレオン戦争は近代ヨーロッパのナショナリズムに夜明けをもたらした、といわれる。また何よりも軍事制度そのものが問題となった。そうした意味でこの戦争は重要な論点を提供してくれるのである。

他方、日本における最近の軍隊研究の動向には目を見張るものがある。昨年の『歴史学研究』は4号にわたり「特集 変容する「軍隊」「戦争」像—帝国・国家・地域社会と武装する民衆」と題する特集を組んだ。もはや軍隊・軍事・戦争についての研究は歴史研究上の正当でしかも重要な地位を占めるようになったといえる。こうした研究なくして近代や国家の編成過程は語れないのである。

さて、われわれのセッションであるが、「祖国戦争」に良く表わされたように、ロシア軍の重層的（多面的）な構成、軍隊内部の指揮系統・規律、から始まり、その特殊性、また「祖国戦争」を背景とするその後の外交政策やロシア社会について論じあおうとするものである。

■趣旨説明：豊川浩一

■田中良英：「18世紀前半ロシア軍事史の諸問題—エリート部隊を中心に—（仮題）」

18世紀ロシア軍の実態について、具体的には戦術・装備のレベル、戦闘力や兵站能力、ロシア政府の動員や人材育成などで意図した方向性について考察する。

■松村岳志：「1812年前後のロシア軍の精神」

19世紀前半のロシア軍の国民軍化というテーゼを考えながら、ナポレオン戦争前後の軍の精神の変化を中心に報告する。

■池本今日子：「聖書協会と神聖同盟条約と、その背景としての1812年（仮題）」

ナポレオン戦争を背景に、社会対策として神聖同盟条約と聖書協会を検討する。

■コメンテーター：浅野明

(豊川浩一)

## ●四学会共同シンポジウム「リーダーとリーダーシップを作るもの」

日時：2012年10月7日（日）14:00～17:30

場所：同志社大学新町キャンパス臨光館 R301室

### 司会陣

望月哲男（4学会合同大会企画委員）

下斗米伸夫（ロシア・東欧学会／法政大学）

鴻野わか菜（ロシア文学会・JSSEES／千葉大学）

- 14:00 開会の言葉：望月哲男  
趣旨説明、パネリスト紹介、ルール説明
- 14:05-15:10 第一部 司会：鴻野わか菜  
報告1 三浦清美（JSSEES／電気通信大学）  
「反乱の世紀における中庸の指導者――アレクセイ・ミハイロヴィチの場合」  
報告2 村田真一（ロシア文学会／上智大学）  
「1900-30年代のロシア文学におけるリーダーのイメージ」
- 15:10-16:15 第二部 司会：下斗米伸夫  
報告3 池田嘉郎（ロシア史研究会／東京理科大学）  
「革命期ロシアにおけるリーダーシップ：構想・制度・人物」  
報告4 永綱憲悟（ロシア・東欧学会／亜細亜大学）  
「ソ連人としてのプーチン――個性とリーダーシップ」
- 16:15-16:25 休憩
- 16:25-17:30 全体討論・総括 司会：望月哲男

\*懇親会費の受付は10月6日（土）より同志社大学今出川校地新町キャンパス臨光館2階の日本ロシア文学会受付にて行っておりますので、参加希望者は4学会合同シンポジウムの開始前にお支払いください。

## 【ロシア史研 三月例会】

「フィンランドにおける『ナショナル・ヒストリー』の形成と『東カレリア』

石野裕子（津田塾大学・研究員）

本発表では、フィンランドにおける「ナショナル・ヒストリー」においてなぜフィンランド域外の「東カレリア（ロシア・カレリアのフィンランド側の呼称）」が不可欠であったのかを、先行研究の整理からフィンランドにおけるフィンランド史の叙述をめぐる議論、独立以降の「ナショナル・ヒストリー」記述の事例を取り上げて論じた。

実質的に13世紀から6世紀もの間スウェーデンに、19世紀から約1世紀もの間ロシア帝国に統治された歴史を有するフィンランドでは「ナショナル・ヒストリー」形成過程において、「フィンランド」はいつ始まったのかという問題がスウェーデン統治時代からすでに知識人の間で議論されてきた。独立以降、「ナショナル・ヒストリー」形成の動きがヘルシンキ大学を中心に起こったが、そこではスウェーデン統治時代以前から「フィンランド」が存在したという説が支持を得るようになった。その中心的主唱者である歴史学者ヤルマリ・ヤーッコラは、1932年にヘルシンキ大学で北歐史から独立したフィンランド史講座を担当する初めての教授に就任し、「ナショナル・ヒストリー」

形成に力を注いだ人物であった。ヤーッコラは叙事詩『カレワラ』を歴史史料として用いることで、800～1100年代にすでに「フィンランド古代」が存在したとする説を主張した。また、「東の道」「フェンノ・スカンディヤ」「『東』と『西』の間のフィンランド」という以前からフィンランド及びスカンディナヴィアの歴史学界で用いられてきた用語を独自に解釈し直すことで、「ナショナル・ヒストリー」形成を図った。『カレワラ』の発祥地とされるフィンランド域外のロシア・カレリアを含んだ「フィンランド」という設定が前提となるヤーッコラの「ナショナル・ヒストリー」は、両大戦間期に最高潮を迎えた「大フィンランド」思想と重なり合う形で、学界のみならず一般民衆の間でも幅広い支持を得た。

第一次ソ=フィン戦争（冬戦争）後の1940年にヤーッコラが出版したフィンランド史概説書『フィンランド史の概略』はベストセラーとなったが、そのことが契機となり、ヤーッコラは外務省の依頼による覚書『東カレリアとコラ半島問題』を執筆した。同覚書の目的は当初ドイツにフィンランドによる「東カレリア」獲得の正統性を示すことだったが、第二次ソ=フィン戦争（継続戦争）以降、本格的にプロパガンダ資料として使用されることになり、『フィンランドの東方問題』と題名を変え、ドイツ語だけではなく、フランス語、英語版などが作られ、世界中に配布され、フィンランド国内でも一般販売された。

以上のように、両大戦間期のフィンランドにおける「ナショナル・ヒストリー」形成は、「東カレリア」抜きでは語れず、さらには「大フィンランド」思想と重複する形で政治的にも利用されたのであった。

本報告では参加者から多くの貴重なご意見をいただいた。「北欧」「ヨーロッパ」といった枠にふとすると閉じこもりがちであった報告者にとってロシア史の専門家からのご意見は非常に刺激となった。このような機会を与えてくれた小森宏美氏を始めとするロシア史研究会の皆様にご挨拶を申し上げます。

## 【ロシア史研 四月例会】

ロシア史研究会・例会参加記

熊切唯（首都大学東京・院）

2012年4月21日、4月例会が早稲田大学において開催された。今回は内田健二氏と中嶋毅氏をコメンテーターとし、立石洋子氏の『国民統合と歴史学：スターリン期ソ連における『国民史』論争』に対する合評が行われた。本書で立石氏は、ソ連における自国史像の変遷について研究を行った。



（写真：中嶋毅・内田健二・立石洋子；小森宏美撮影）

内田氏からは、1)1930年代以降の、ロシア・非ロシア民族双方の歴史に対する評価の詳細な分析、2)国際情勢との関連への着目、3)上記2点から導き出された歴史叙述の連続性と変化の提示、について高い評価が与えられた。一方、歴史学がソ連国民のアイデンティティの基礎を提示できたのか、といった大きな問題を含め若干の疑問点も出された（内田氏からの批評に関する

の詳細は、最新号の『ロシア史研究』第90号をご参照ください。

中嶋氏からは、1930年代後半からの盛期スターリン時代に日本で初めて踏み込んだ実証的研究であり、論争を丹念に分析する事でこれまでの一面的理解を乗り越えた画期的著作であるとの評価がなされた。また、大テロル下での歴史家集団の多様性の提示にも貢献したとも述べられた。他方で、1920年代の叙述はやや図式的であるとの指摘があり、対外要因の強調が国内要因を相対的に軽視することになっていないか、という疑問点も出された。

その後、フロアから多くの質問が出された。国民統合においてメディアの役割はあったのかという問いに対し、立石氏からは歴史学よりもメディアの役割が大きかったと回答された。どのような要因が諸民族の歴史叙述に影響を与えたのかという問いに対しては、共和国のない民族の叙述はなく、各民族の歴史叙述は帝政期における研究の進捗状況や専門家の数に左右されたと回答された。

表題におかれている「歴史学」よりも「歴史認識」に関心が向いているのではないか、という指摘に対しては、教師や大衆の反応に対して踏み込まず、専門家に着目したために「歴史学」とした、と回答された。立石氏によれば、学問としての歴史学のなかで政治的に問題になった部分だけを取り上げた、とのことであった。また、この指摘に関連した活発な議論がフロアで行われた。

参加者も多いなか、数多くの興味深い質疑がなされ、意義深い例会となった。

## 【ロシア史研 五月例会】

ロシア史研究会・東京大学中東地域研究センター合同例会参加記

藤沢潤（東京大学・院）

5月26日に東京大学中東地域研究センターと合同で、鶴見太郎『ロシア・シオニズムの想像力 ユダヤ人・帝国・パレスチナ』（東京大学出版会、2011年）と、藤波伸嘉『オスマン帝国と立憲政 青年トルコ革命における政治、宗教、共同体』（名古屋大学出版会、2011年）の合評会が開かれた。鶴見氏と藤波氏がお互いの著作を批評しあうという形式で行われた今回の合評会では、ロシア帝国史とオスマン帝国史の比較など、重要な論点について活発な議論がなされた。

鶴見氏と藤波氏の研究の共通点として、両者ともに第一次世界大戦以前の「帝国」におけるマイノリティの問題を取り上げている点があげられる。鶴見氏は、ロシア帝国という多民族社会のなかでユダヤ人としての地位を確保するために「ネーション」という「外殻」を求めたロシア・シオニズムの分析を通じて、ロシア帝国に留まった非社会主義系シオニストが既に構築主義的観点を持っていた点を指摘する。藤波氏は1908年の青年トルコ革命から第一次世界大戦勃発までの時期に、オスマン帝国で立憲政が機能していた点を、トルコ人とギリシア人の関係性を中心に分析している。

鶴見氏と藤波氏がともに、オスマン帝国とロシア帝国の比較を軸に報告したため、比較帝国論について実りある議論がなされた。鶴見氏が指摘したように、多民族国家が民族を単位に整序された国家であるのに対して、ロシア帝国は統治単位そのものが多様であり、多民族帝国というよりも「多次元帝国」であった。これに対して、藤波氏は、身分制がなく民族が制度的に保障されていないオスマン帝国は「多宗教帝国」であったと指摘した。また、オスマン帝国の「支配民族」であったムスリム・トルコ人は、ロシア帝国におけるロシア人よりもはるかに社会経済文化的に劣位にあったという藤波氏の指摘は興味深かった。

東京大学中東地域研究センターとの合同例会となった今回の合評会は、世界史におけるロシア史の位置づけについて改めて考えるきっかけとなった。同様の合同例会が今後とも企画されることを期待したい。

### 【ロシア史研究会委員会より】

#### ＜2012年度ロシア史研究会大会の宿泊について＞

2012年度ロシア史研究会大会（四学会合同大会）は、紅葉シーズンの京都で開催されますので、宿泊地の確保が困難になることが予想されます。参加を予定されている方は、早めにホテル等のご予約をご検討ください。

#### ＜例会の案内＞

2012年7月、10月に下記の例会が開催されます。詳細は追って、メール・葉書にてご連絡いたします。ご参加をお待ちいたしております。

- 7月の例会：2012年7月28日15:00より（場所：早稲田大学9号館304号室）  
竹村寧乃「ソ連初期ザカフカス連邦における予算問題：1927/28年度を中心に」
- 10月の例会：2012年10月8日10:00~12:30（場所：佛教大学紫野キャンパス11号館3階会議室）  
デイビッド・ランセル（インディアナ大学）「ロシア国家遺産・休養地の不動産開発事業者への売却と市民社会勢力の出現」(英語使用)  
司会：デイビッド・ウルフ氏(北大スラブ研究センター)  
注記：例会後に近くで昼食会をもちます(午後2時頃まで)。希望者はご参加ください。

#### ＜新会員の紹介＞

2012年4月～6月の新入会員（3名、入会日順）をお知らせします。

- 飯島 康夫（2012年4月2日）  
所属：聖学院大学政治経済学部  
専攻・テーマ：クリミア戦争後のロシアの極東地域進出と同地域内での要塞都市の建設過程などとアジア系商人の関わり
- 前田 英勝（2012年5月1日）  
所属：創価大学名誉教授  
専攻・テーマ：民族の特性とその興亡
- 藤本 健太郎（2012年5月28日）  
所属：京都大学大学院文学研究科現代史学専修修士課程  
専攻・テーマ：日露戦争後の日露関係（樺太、千島を中心に）

-----  
ロシア史研ニューズレター  
第86号 2012年7月19日発行  
編集・発行 ロシア史研究会委員会  
(担当：青島陽子)  
〒162-8601  
東京都新宿区神楽坂1-3  
東京理科大学理学部第一部教養学科  
池田嘉郎研究室気付  
-----